

平成 30 年 6 月 24 日現在

機関番号：14303

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02109

研究課題名(和文)「描く人(ホモ・ピクトル)」の倫理と冒険：イメージ批判に基づく人間学的美学の構想

研究課題名(英文) Dialectic between Ethicality and Adventurousness of Homo Pictor: Towards a Newer Anthropological Aesthetics Based on Critical Image Theory

研究代表者

三木 順子(MIKI, Junko)

京都工芸繊維大学・デザイン・建築学系・准教授

研究者番号：00283705

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：イメージは、限界を持つがゆえに歴史のなかで繰り返し禁止されてきた。一方で人は、限界を持つイメージを、それでもなお描く。本研究では、禁止と侵犯、限界と越境といった二律背反にイメージの本質をみるとともに、イメージを描く営みを、倫理をふまえた冒険というパラドクスの実践として捉え直し、ホモ・ピクトル(描く人)としての人間の意義を尋ねる新しい人間学的美学の可能性を明るみに出した。加えて、新しい人間学的美学において、人間を中心に据えるのではなく、むしろイメージをを主体として、イメージが人間をメディアとしていかに発生してくるのかを尋ねる発生学的なアプローチが重要となるであろうことを示唆した。

研究成果の概要(英文)：As is already said in various image theories, image cannot represent every kind of things. There is a limitation in the ability of image, and therefore, to depict an image have been forbidden repeatedly. Notwithstanding, innumerable image have been produced. Image is prohibited, while it breaking the prohibition, as well, image has a limitation, while it going beyond the limitation. In this study, regarding such antinomy, we newly evaluated the production of image as a practice of the dialectic between ethicality and adventurousness. Furthermore, we made clear the actuality of a newer anthropological aesthetics inquiring the significance of homo pictor. We also suggested that it would be necessary for the anthropological aesthetic to approach image in an embryological method, namely, to describe image as an autonomous subject that generates itself through the medium of human being.

研究分野：美学

キーワード：形象 イメージ ホモ・ピクトル 人間学 人間学的美学 イメージ批判

1. 研究開始当初の背景

人間とは何かを尋ねる哲学的人間学は、人間がいかなる点において他の動物から区別されるのかを繰り返し問うてきた。人は、言語をとおして思考し、道具を用いてものを作り、自発的に遊戯する。それだけではない。われわれはイメージを描く。ハンス・ヨーナスがすでに定義しているとおり、人間とは「描く人 homo pictor」(H・ヨーナス『生命の哲学 有機体と自由』2008) だといえよう。「描く」こととは、言語による認識と同様に現実を抽象化して把握することであり、道具を用いて形をうみだすことであり、時間と空間を制御しながら現実から遊戯的に距離をとることにほかならない。描くことにおいて、人間の根本的な能力がもっとも総合的な仕方

で機能している。だが問題は、イメージを描くことに、自明のこのように人間の「自由」が認められてきた点であろう。描く自由とは、いかなるイメージをも描きうる万能を意味するのではない。むしろイメージは、限界を持つがゆえに歴史のなかで幾度も禁止されてきた。一方でイメージは、限界を侵す危険な力を孕むからこそ人を魅了してきもきた。イメージを描くことの本質は、禁止と侵犯の二律背反にあるといえる。

本研究は、この二律背反を重視し、人間の描きだすイメージなるものについての批判的考察を、なにを制すべきかを問う次元から、敢えてなすべき冒険を問う次元へと深めようと試みるものである。

研究代表者は、これまで一貫して、ドイツ語の Bild (イメージ) の概念を考察してきた(単著『形象という経験』2002 / 科研若手研究(B)「不在としての形象」2003-2005)。さらに、ベンヤミンとアドルノを専門とする本研究分担者らが立ち上げた「形象論研究会」に加わり、2011年以降、共同で、イメージの禁止や否定という観点から批判的にイメージの意義を問うてきた。本研究は、この共同研究をとおして、イメージ批判が、特定の時代の現象や個別の理論に留まるのではなく、むしろ、人間の創造行為の全体に通底する根本問題であることを予感していくなかで立案されたものである。

2. 研究の目的

イメージの倫理は、表現しえないもの際に押し黙り、イメージなるものの存在意義を不問に付すような「慎ましさ」にあ

るのではない。本研究は、以下の三つの段階を踏みながら、イメージの倫理より積極的で実践的な次元を新たに開くことを目指すものである。

(1) イメージの倫理: イメージの倫理のもっともラディカルな実践形式は、描くことの徹底した禁止と否定であろう。だが、スーザン・ソントグが指摘するように、いまや禁止や否定は、語りえないものを表すための常套手段(マニエラ)となってしまった(S.ソントグ『ラディカルな意志のスタイル』1974)。本研究ではまず、ベンヤミンとアドルノの仮象批判に注目しながら、常套化することを拒み強靱なイメージ批判の力として機能する禁止と否定の論理を探る。

(2) イメージの二律背反: イメージは、限界を持つがゆえに禁止される一方で、その限界を侵すからこそ人を魅了してきもきた。イメージの力の本質は、禁止と侵犯の二律背反にある。そもそもプラトンが詩人の追放を唱えたのも、詩人の吟じるものがたんなる虚偽に留まらず、大衆を惑わす魅力を備えていることを見抜いていたからにほかならない。美学史を改めて省みるならば、イメージなるものが、禁止と侵犯 / 虚偽と魅惑 / 限界と越境といった、様々な二律背反においてパラドキシカルに語られてきたことがわかる。本研究では、このような二律背反を重視しながら、描く人(ホモ・ピクトル)の自由を、限界をふまえた冒険というパラドクスを実践する能力として捉え直していく。

(3) 倫理と冒険の弁証法: 描くことの禁止と否定のなかに、イメージの倫理がすべて凝縮されているわけではない。倫理とは、イメージのあるべき姿を問い糾す批判の力と論理にほかならない。本研究のもっとも大きな目的は、限界をふまえた冒険というパラドクスの実践が、イメージというものが自己自身について批判的に問い直す力と論理としてどのように機能するのかを省み、イメージを「描く人 homo pictor」としての人間の意義と可能性を明るみに出すことにある。それは、人間の創造性を倫理と冒険の弁証法という様相においてとらえ直す、新しい人間学的美学を構築することに繋がるであろう。

3. 研究の方法

本研究は、代表者と三名の分担者の共同体制で、理論の読解・イメージ研究の動向

調査・考察・ディスカッションに基づいて進められた。描くことにおける禁止と侵犯の拮抗は、美学理論や芸術実践において様々な形で見いだされる。研究代表者の三木は芸術学、柿木は哲学、高安はデザイン思想、原は思想史および文化史の視点から、各々が理論解釈と調査を進め、研究会での報告・討議をとおして個々の成果を総合していった。研究会でのディスカッションの充実を目指して、毎回、議論の主要モチーフをあらかじめ設定し、そのモチーフに関連する分野の専門家をゲスト・ディスカッサントとして招聘することとした。さらに、研究のプラットフォームとして機能する雑誌『形象』を創刊し、研究期間中に計3冊を発行した。

なお、考察においては、以下の二つの点を重視することとした。

(1) 拡張された意味での「イメージ」:
描くこととは、目に見える画像の制作に限定されるわけではない。言語や音や身体の動き、あるいは光と影からなる、非物質的で形の定まらないヴィジョンや、不定形の広がりをもつ都市空間もまた、人間が描きだすものにほかならない。さらに重要なのは、過去を想起し未来を構想するという、人間の生の根本的な営為のうちに、すでに、世界を一つの連続態として描こうとする内的な志向、すなわち想像力が働いている点である。本研究では、描くことを、これらすべてを含む包括的な意味での「イメージ」の創造と捉え、描くという営みを、人間学的な視点から改めて問題化する。

(2) ドイツ語圏とフランス語圏の議論:
ドイツ語圏では Bildwissenschaft (イメージ学) が展開を続けている。一方、近年フランスでは、ディディ＝ユベルマンやジャック・ランシエールらによって、ホロコーストの表象不可能性という倫理的スローガンに対してイメージ自身がどのように抵抗しうるのかが問われている。本研究は、ドイツ語圏の美学・思想を専門とするメンバーで組織されているが、フランス語圏の動向にも目配りし、より広い視点からのイメージ批判の議論を目指す。

4. 研究成果

三年の研究期間の全体をとおして、研究メンバーの各々が、自身が扱う「イメージ」なるものの射程を広げていった。三木は、モダン・アートにおける形の否定やアンフォルメルの問題を、現代都市の空間体験における不可視性の問題へと拡張し、柿木は、

ベンヤミンの仮象批判をムジーク＝テアターの問題と繋げていった。高安は、アドルノの形象否定を、近現代のタイポグラフィ・デザインの理念と結びつけ、原はアドルノの批判美学を今日のメディア批判の問題へと展開させた。各々の考察は、美学およびドイツ研究関係の国内および国際学会や研究誌で公表されている。

そうした個別研究を基にしながら、本研究ではさらに、ゲスト研究者を招聘して毎年度開催した共同研究会をとおして、以下の三つの新たな成果をだすことができた。

(1) イメージのもつ限界についての批判的な考察は、20世紀という時代に、ベンヤミンやアドルノらによって自覚的になされるようになった。このことについては、初年度である2015年度に創刊した研究誌『形象』1号で詳しく論じている。さらに本研究では、このようなイメージ批判が、特定の時代の現象や個別の理論に留まるものではなく、むしろ、人間の創造行為の全体に通底する根本問題であることを明らかにしていった。具体的には、中世の「形象」概念(スペキエス概念)やカントの「構想力」の議論やポストモダン思想にも目配りしながら、近代の以前と以降を含んだ美学史の流れをイメージ批判の歴史として再解釈するという趣旨で、研究誌『形象』2号を編み2016年度に刊行した。

(2) 人は、限界をもつイメージを、それでもなお描く。それは、しかし、限界の「克服」や「乗り越え」を意味するのではない。むしろ目を向けるべきは、イメージや想像力というものがもつ弱さ、曖昧さ、不完全さ、不透明さから、描く人(ホモ・ピクトル)である人間の知覚の特殊な深さが開かれてくるさまである。本研究では、このような特殊な知覚の深みを、フランスの現象学——特に、レヴィナス、デュフレンヌ、メルロ＝ポンティ——の議論なかに読み取り、そのような知覚のありかたが、描く人(ホモ・ピクトル)が実践する倫理と冒険の弁証法の重要な鍵となることを見据えながら、研究誌『形象』3号を編み2017年度に刊行した。

(3) 倫理と冒険の弁証法として人間の創造性を捉え直すことは、人間学的な視点からの美学の構築を目指すことを意味している。周知のとおり、人間とほかの動物との違いを問う哲学的人間学は、その人間中心主義的な姿勢のゆえに、20世紀の半ば以降激しく批判されてきた。本研究では、このような哲学からの批判をふまえたうえで、フロイトの精神分析やハンス・ベルティンクの『イメージ人類学』から示唆を得ながら、イメージを主体として、そのイメージが人間の身体をメディアとしていかに生じてくるかという発生学的な方向からの考察に重点を置き、人間中心主義という誤謬に

陥ることのない人間学的美学の可能性を示すことができた。この成果は、研究誌『形象』4号でとりまとめ2018年度に刊行する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 20 件)

三木 順子、「不可視の都市風景 現代都市と現代文学における「日常空間」」、『言語文化研究』29巻4号、2018、197-209頁、査読無

柿木 伸之、「音楽=劇()の批判的構成のために—ベンヤミンとアドルノの美学を手がかりに」、『a+a 美学研究』Vol. 12、2018、72-87頁、査読有

柿木 伸之、「形象の裂傷—ショアの表象をめぐるフランスの議論が問いかけるもの」、『形象』3号、2018、65-76頁、査読無

MIKI, Junko, “Dialectic between Tableau and Map: Updating the Phase of Space-gazing”, *Aesthetics and Mass Culture: Proceedings of ICA 2016, 2017*, pp.148-152, 査読有

TAKAYASU, Keisuke, “Concrete Poetry using Japanese Language”, *Aesthetics and Mass Culture: Proceedings of ICA 2016, 2017*, pp.829-833, 査読有

TAKAYASU, Keisuke, “Criticism of the Bauhaus Concept in the Ulm School of Design”, *The Journal of the Asian Conference of Design History and Theory*, vol.2, 2017, pp.9-18, 査読有

三木 順子、「新しいミュージアムのかたち 工場・制作室・研究所」、『a+a 美学研究』Vol. 11、2017、164-177頁、査読無

高安 啓介、「ウルム造形大学における脱バウハウス思想」、『a+a 美学研究』Vol. 11、2017、118-131頁、査読無

三木 順子、「素描と身振り 形象の「動力因」を求めて」、『形象』2号、2017、72-91頁、査読無

高安 啓介、「形象としての具体詩」、『形象』2号、2017、50-71頁、査読無

柿木 伸之、「形象における歴史 ベンヤミンの歴史哲学における構成の理論」、『形象』2号、2017、29-49頁、査読無

原 千史、「ヴェルツブルク訪問記 ゲルハルト・シュヴェッペンホイザー氏とトーマス・フリードリヒ氏との鼎談」、『形象』2号、2017、94-99頁、査読無

柿木 伸之、「ベンヤミンの形象の論理 仮象批判から記憶の形象へ」、『形象』1号、2016、30-55頁、査読無

高安 啓介、「アドルノ美学における形象の問題」、『形象』1号、2016、56-77頁、査読無

原 千史、「批判理論に依拠した形象論 シュヴェッペンホイザー父子を中心に」、『形象』1号、2016、78-88頁、査読無

Gottfried Boehm 「形象という問題」(三木 順子 訳)、『形象』1号、2016、10-28頁、査読無

三木 順子、柿木 伸之、高安 啓介、原 千史、「描く人(ホモ・ピクトル)の倫理と冒険」、『形象』1号、2016、2-6頁、査読無

MIKI, Junko, “Anti-form Strategy in Architecture: Periodic Reconstruction at Ise Shrine”, *Performing Cultures: Proceedings of ICA 2013, vol.3, 2015*, pp.63-72, 査読有

原 千史、「アドルノ思想における形象禁止のモチーフについて—アウシュヴィッツ以後の美的形象への批判」、『ドイツ文学論集』48号、16-27頁、査読有

TAKAYASU, Keisuke, “The Development of Design Education for Children in Japan”, *Journal of Asian Conference of Design History and Theory*, vol.1, 2015, pp.119-127, 査読有

[学会発表](計 9 件)

高安 啓介、「バウハウスとデザイン思想」第2回デザイン関連学会シンポジウム、2017年9月27日、京都工芸繊維大学

TAKAYASU, Keisuke, “Criticism of the Bauhaus Concept in the Ulm School of Design”, *Asian Conference of Design History and Theory 2017 TOKYO*, 2017/09/01, Tsuda University

柿木 伸之、「音楽=劇の批判的構成に向けて—ベンヤミンとアドルノの美学を手がかりに」、シンポジウム「シアトロクラシー—観客の美学と政治学」(大阪大学美学研究室主催) 2017年9月11日、大阪大

学

三木 順子、「不可視の都市風景 イタロ・カルヴィーノと村上春樹における「場」のイメージ化」、国際カンファレンス「風景と文学、文学と風景」(立命館大学言語文化研究所主催)、2017年3月18日、立命館大学

TAKAYASU, Keisuke, "The Double Meaning of Modern Architecture in the Japanese Context", 10th Conference of the International Committee for Design History and Design Studies, 2016/10/28, National Taiwan University of Science and Technology.

MIKI, Junko, "Dialectic between Tableau and Map: Updating the Phase of Space gazing", 20th International Congress of Aesthetic, 2016/07/28, Seoul National University

TAKAYASU, Keisuke, "Concrete Poetry Using Japanese Language", 20th International Congress of Aesthetic, 2016/07/28, Seoul National University

TAKAYASU, Keisuke, "Design Education for Children in Japan", Asian Conference of Design History and Theory 2015 OSAKA, 2015/10/04, Osaka University

三木 順子、「イコンの転回の射程 素描と身振りに基づく一考察」、美学会西部会第303回研究発表会、2015年5月30日、京都大学

〔図書〕(計 3 件)

三木 順子他著、並木誠土編『描かれた都市と建築』昭和堂、2017、(「地図とタブロー —都市を描く二つのメディアとその交差」 191-214頁) 全 256頁

MIKI, Junko, *Le Sanctuaire d'Ise: Récit de la 62e reconstruction*, ed. CLUZEL, Jean Sebastien / NISHIDA, Masatsugu, 2015, (Représenter le sanctuaire d'Ise, pp.125-134), 192

高安 啓介他著、平子友長他編『危機に對峙する思考』梓書房、2016、(「建築における批判的地域主義」 299-314頁) 全 598頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

三木 順子 (MIKI, Junko)
京都工芸繊維大学大学・デザイン・建築学

系・准教授

研究者番号： 00283705

(2) 研究分担者

柿木 伸之 (KAKIGI, Nobuyuki)
広島大学・国際学部・准教授
研究者番号： 60347614

原 千史 (HARA, Chifumi)
福山大学・人間科学部・教授
研究者番号： 20234567

高安 啓介 (TAKAYASU, Keisuke)
大阪大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号： 70248293

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

なし